



## 聖木曜日・主の晩さん(ヨハネ 13:1-15)

正しい生き様を超えて愛を注がれた

聖木曜日、弟子たちの足を洗う場面が取り上げられました。イエスの行動は、「正しい生き方」を超越した生き方でした。私たちもそれぞれの分に応じて、「正しい生き方」を超える生き方が求められています。「正しさの物差しを超えた生き方」を学ぶことにしましょう。

過越の食事は、ユダヤ人が伝統的に受け継いできた食事の形式でした。かつてイスラエルの先祖たちがエジプトを脱出するとき、指示された通りに準備をして食事をしたことで、エジプト全土で広がった災いを過ぎ越し、無事に約束の地にたどり着いたことを食事と家長の解説を聞きながら子孫に受け継いできた儀式でした。

イエスはこの過越の食事を、神の民が滅びを過ぎ越して救われる、新しい「過越の食事」に当てはめて行いました。この食事で主人が食事の席に招かれた人の足を洗うことはもちろん要求されていませんし、その上さらに、食事を中断してまで行う理由もどこにもありませんでした。

ですから「正しく伝統の食事を執り行う」という意味で考えると、イエスが弟子たちの足を洗うことはまったく必要のないことでした。

けれども、イエスはこのわざを「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」と仰っています。これが以後弟子たちにとっての規範になるわけです。

ここで、食事を途中で中断して足を洗って上げる行為が大事なのでしょうか。今の典礼で言う「洗足式」が大事なのでしょうか。儀式書を見ると、「洗足式」は「任意」と書かれています。つまり、聖木曜日の典礼に欠かせない、義務的な所作というわけではないのです。もっと大切なことがあるのだと思います。洗足式はその「大切なもの」を学ぶためのものなのでしょう。

私はその答えを、「正しい生き方を超えた生き方」としてみました。正しいかどうかには生き方の物差しを置くのでは不十分で、イエスに倣うためには、「正しい生き方を超えて、愛を注ぐ生き方まで成長する」この考え方が必要です。

私たちはどうしても、「ちゃんとやっている」ということを物差しにしてしまいがちです。主任司祭がミサの説教を準備することは「ちゃんとしている」という物差しには叶っているでしょう。けれども愛を注いでいるかという、足りないかも知れません。

イエスは愛を注ぐ生き方を「模範として示した」のです。「ちゃんとしているか」を気にする生き方はイエスの物差しではありません。ここに至ってもイエスを裏切ろうとしているユダに愛を注いだイエスの生き方を私たちは模範とします。いつからそうしますか？答えは明らかです。